



Do you like

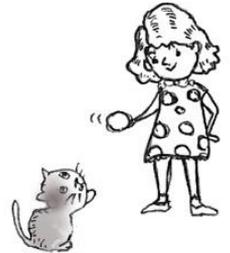
some more

ENGLISH?



日本の英語学習事始め 3 ～教科書～

今回は、いつもより少し長い英語通信をお届けします。英学事始めの続きで、日本での英語学習が始まったころの教科書を少し見ていきたいと思います。まずは、英語を学ばなければ！という気運が高まった江戸時代の終わりごろ、東京大学の前身である「開成所」から英語のテキストが出版されました。慶応2年（1866年）に主に英単語を学ぶ「英吉利単語篇」、単語と文法を学ぶ「英語階梯」、読解を身に着ける「英語訓蒙」の三種類が出そろいました。「英語階梯」「英語訓蒙」はいかめしいタイトルですが、階梯はステップというイメージがあり、入門書、手引書という意味が、訓蒙は「初心者を教えさとすという」意味があります。これらのテキストは、書名以外はすべて英文で書かれていたようです。



えー、初心者とか入門書とか言いながら難しいじゃないか！？

確かにそうですね。内容を少しだけ紹介しておきましょう。

まずは、「英語階梯」の本文

Ann and her cat are at play. go away and play at ball in the hall. I am not so tall as he is. do not go on the wall. if you go up on the wall, you may fall. (文頭の小さな文字は原書のまま)

次に「英語訓蒙」のレッスン1

I see a hat. It is my hat. Put it on and let me see you. Can you go and get a cup? Yes, O had my tin cup at the well. It is on the nail. Put it up when you are done.



どうですか？「英語階梯」の文章では、アンという少女が猫と遊んでいるところから始まりますが、その後の身長や塀の話に特に脈絡はないようです。「英語訓蒙」の方も、帽子とコップのつながりはありません。そして、気づいたでしょうか？いずれも、be 動詞、代名詞、比較級、条件文、命令文、助動詞、そして受動態・・・と初っ端から文法が多彩です。



いきなりレッスン1からですか・・・？だって、be 動詞、一般動詞、can などは現在の中1で学習しますが、比較級は中2、受動態は中3じゃないですか？

開成所の生徒といえは、今の東大生です。しかも、あまり比較できる材料もないので、こんなものなのか？と多少は疑問に思ったものの、想像力を駆使して英語を習得していったのではないのでしょうか。



ということは、教科書が悪い、先生が悪い、などという文句は言わないで、自分で考えて勉強しろ、ってことだね。

江戸から明治へ時代が変わり、英語の教科書も飛躍的に充実していきます。そして、学習者はエリートだけでなく、中学生が学科として学ぶことになるので、教科書も様々な工夫がこらされていきます。

国会図書館のデジタルコレクションで、「英語訓蒙」阪上汎愛堂、工藤精一郎編（明治18年）という書籍をみることが出来ます。この本は、初学者、独学者に便宜をはかることが目的だと最初に記されています。慶応2年の「英語訓蒙」がすべて英文ならば、このテキストの解説はすべてローマ字です。何故ローマ字である必要性があったのかは分かりません。

テキストの基本のパターンは、各章の冒頭に単語をのせ、その発音をカタカナで、意味をローマ字で、次に英語で文例をあげています。

第1章は、まず be 動詞を学習し、例文は

I am rich. (Watakushi ha kanemochide gozaimasu) で、**You, He, We, You, They** の活用があげられます。

第2章の表題単語は、

poor(binbo) **old**(toshiyori) **young**(wakai) **hungry**(kufuku/haragahette/hidaruku)
thirsty(nodogakawaite/kwasshite) **sleepy**(nemui) **tired**(tukarete/kutabirete)

同じくそれぞれの人称で活用した例文が記されます。



ちょっと待って・・・hungry の hidaruku, thirsty の kwasshite ってどういう意味ですか？

hidaruku は、饑くと書き（ひだるい） 飢いという形容詞の連用形です。意味は、空腹であること、飢えてひもじいこと。kwasshite は、渴して、つまりのどが渴くということです。



英語より日本語のほうが難しいや。

このテキストでは、be 動詞の活用、一般動詞の現在、過去、未来、現在完了、数字や時刻、助動詞の用法が説明されていて、簡単な文章を読む文法知識が身に着くようになっています。疑問詞を使った例文が豊富なのも特徴で、巻末に簡単な会話文と字引があり、コンパクトな便利帳のような内容です。

明治期にはこのほかにもいろいろな文法テキストが出版されましたが、学校で主に使われていた、リーダー教材についてもう少しお話をします。



リーダーってなんですか？

みなさんが使っている現在の中学校では、一冊のテキストに、英語の文法事項も読解もリスニングも盛り込まれていますよね。高校では、文法を学習する授業と読み物を通じて学習する読解授業に分かれています。文法はグラマー（あるいは英語表現）、読解はリーダー（あるいはコミュニケーション英語）といえます。文法というのは、言語のルールを学ぶものですが、リーダーの授業はまとまった文章を読むことで理解を深めるのが目的です。



なるほど。確かに私たちは小学校に入学してから、どんどん難しい文章を読んでいますね。でも、日本語の文法は中学からのような気がするけれど・・・。

文法は母国語であれば自然に身についていくので、意識をしないのかもしれませんが、「て」「に」「を」「は」という日本語の助詞のルールは小学校低学年で習います。

さて、話を明治期の英語教科書に戻し、明治期にもっとも広く使われたとされる「**ウィルソン・リーダー**」「**ナショナル・リーダー**」をここで紹介したいと思います。

まず、**ウィルソン・リーダー**（THE SERIES OF SCHOOL AND FAMILY READERS MARCIUS WILLSON 著）は、入門書（PRIMER）と読本5巻からなるもので、第一巻（THE FIRST READER OF THE SCHOOL AND FAMILY SERIES）は、明治初期の中学校の教科書として広く用いられました。原書は、アメリカの小学生の母国語教科書で、初めは舶来本として原書が使われていましたが、明治10年代の後半から翻刻本が

出回るようになりました。興味深いのは、学制が施行された明治初期に、このシリーズの翻訳が『小学読本』（小学校の教科書）として使われたことです。



えっ？ 中学校の英語の教科書が小学校では国語の教科書・・・みたいな感じ？

学校制度がしっかり整うまでは教科書の材料が少なかったのかもしれませんが。ただ、内容が、キリスト教的要素や海外の生活習慣など日本の風習には馴染まないものも多かったようで、英語にしても日本語にしてもこれらの教科書を読んだ当時の生徒たちがどう感じたか興味深いです。



馴染まない風習とは具体的にはどういうことですか？

では、皆さんが英語を学ぶときに一番初めに学んだことは何でしょう？



えーと A～BCDEFG～♪・・・かな

そうですね。母国語であれ外国語であれ、英語学習の初めに学ぶのはアルファベットです。アルファベットのAといえば・・・？



APPLE !

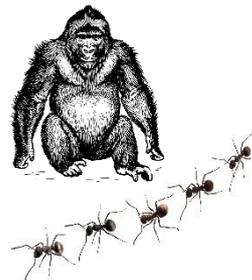


ですよね。ウィルソン・リーダーも最初にイラストともにアルファベットが示されます。それぞれのアルファベットのAの大文字と小文字を学びますが、Aの単語は **A/ (大文字) APE** **a (小文字) /ant** です。



ant も知らないし、APE ってなんだ～？

ant は蟻、APE は類人猿（しっぽのない猿）です



The ape and the ant.
The ape has hands.
The ant has legs
Can the ant run?



じゃあ、Bは何ですか



B/BAT(コウモリ) b/boy



ええっ!? コウモリって、めっちゃアじゃない？

ELK(ヘラジカ) HIVE (ハチの巣) IBEX (野生ヤギ) JAY (かげす) QUAIL (うずら) STAG (牡鹿) URN (ギリシャ風ツボ) VINE WREN (ミソサザイ) YEW (櫟) ZEBU (こぶ牛) など、アルファベットの代表する単語が日本人にはなじみのない動物、植物、日用品などで示されます。



見たことも聞いたこともない・・・。

I am an elk



そして、それぞれのアルファベットに次のような簡単な例文がついています。

The ape has hands. The ant has legs. Can the bat fly? Can the boy run?

ウィルソン・リーダーの入門書は 1 音節2文字、3文字までの単語で文章が構成され、第一読本の第二部は 4文字までの単語が主の文章、第三部では 5文字まで、第四部では 6文字までとなっています。

- 入門書(3文字まで) The fox is sly. How sly he is. Can the hen fly? It is an old hen.
- 第一巻 第二部(4文字まで) Lesson XI Ann has gone to feed hens. Do you see her?
- 第三部(5文字まで) Lesson xxix This must be an old man, for he has a long beard.
- 第四部(6文字まで、簡単な2～3シラブルの語を含む) Lesson xxix The lion is often called the King of Beasts; and when he is wild, and roaming over his native plains

in pursuit of his prey, he is feared both by beasts and men.

次にナショナル・リーダー(New National Readers Charles Barnes 著)ですが、この読本もウィルソン・リーダーと同様に明治期の中学校で教材として最も広く用いられ、全5巻からなります。第1巻をみると、まずアルファベットの活字体(ブロック体)と筆記体が冒頭ページにあり、Lesson 1は犬のイラストがあり、It is a dog.という文章から始まります。それぞれのページの下にSCRIPT EXERCISEとして新出単語の筆記体が記されています。



筆記体ってなんだ～？



私も学校の授業で筆記体は習っていません。

そうでしたね。日本では2002年のゆとり教育導入で、授業時間が削減され筆記体の学習は必修ではなくなったのでしたね。1947年から2001年までの間、日本の中学生は筆記体を学習していました。だから、皆さんのお父さんやお母さん世代は筆記体を書くことが出来ると思います。



書けるとちょっとカッコいい！

アルファベットを使う国々の人でも、現在はパソコンで文章を書くのが主流になり、筆記体を使うことが少なくなっているかもしれませんが、アメリカ、ヨーロッパでは今でも筆記体を教えている学校があります。20世紀初頭では、筆記体は当たり前で習得するものだったのでしょ。



ナショナル・リーダーのパート1は、新出単語を使った短く易しい文章が書かれていて、4～5課進むごとに、READING REVIEW /SPELLING REVIEW という講読と綴り方の復習があります。

PART I LEESON XV *Ann has a new doll. Her mamma' gave it to her. Ann likes the doll, and will get it a new hat. Are you a good girl? Do you like a doll?*



課が進むにつれ語彙も増え、文章も長くなります。そしてパート2では、短編の読み物が掲載されます。

PART II LESSON I *John and his cat Dick do not like rats. They catch all they can. One time, John set a trap to catch some, and then went away and hid with Dick....*

この後、ジョンが仕掛けた罠にネズミが近づきますが、結局、罠にはかからず逃してしまいます。

この教材では、動物(犬、猫)と遊ぶ少年、人形をかわいがる少女、スケート、子供たちと家庭生活、動物とのふれあいなど、都会ではなくアメリカの田舎の生活が描かれています。また、子供たちと親や周りの大人たちとの会話から、当時の人間関係が浮かび上がります。

これらの教科書は、明治の子供たちが初めて外国の生活に触れる機会でした。ラジオもテレビもない時代ですから教科書のイラストだけでさぞかし想像力をたくましくしたのではないかと思います。現在は、映画やテレビ番組、音楽、インターネットなどの様々なメディアを通じて、世界への窓は子供たちにも広がっていますよね。今、皆さんはグローバルという風景が広がる扉の前に立っていると考えてください。英語の学習は、その扉を開く鍵の一つだと言えるでしょう。

Vol.1より足かけ3年間にわたって発信してきました英語通信ですが、今号で一時休止をいたします。学校の教科としてだけでなく、いろいろな側面から英語に触れていただきたいと考えて編集してきました。これまでご愛読ありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしています。



Looking forward to seeing you again!